

資料紹介

鹿児島県国語教育史資料―その二―

「磯長武雄研究ノート」資料補遺

一、磯長武雄著作文献目録

- ・「甲、昭和四年度綴方教育施設」
 - 「綴方教育」昭和五年四月號
 - ・「潮音短歌の都會相」
 - 「潮音」第十六卷昭和五年十月號
 - ・「巻頭言 兒童詩教育の現状を觀る」
 - 「童詩教育」創刊號 昭和七年四月
 - ・「自由放送」田住牛夫（注・磯長のペンネーム）
 - 「童詩教育」創刊號 昭和七年四月
 - ・「兒童への詩話」田住牛夫
 - 「童詩教育」昭和八年十一月
 - ・「生活詩を觀る」
 - 「童詩教育」七月號第一卷第四號
 - ・「山下君の實地授業を觀る」田住牛夫
 - 「童詩教育」第二卷第三號昭和八年十二月
 - ・「街の子供の詩」
 - 「綴り方俱樂部」昭和十年二月號
 - ・「兒童詩の指導精神」
-
- 「工程」創刊號 昭和十年四月
 - 「綴方地區」
 - 「工程」昭和十年十一月號
 - 「年刊日本兒童詩集」への期待」
 - 「工程」昭和十年十一月號
 - 「覗き眼鏡的に― 兒童詩の現状批判」
 - 「工程」昭和十一年三月號
 - 「轉換期の兒童詩― 吉田瑞穂氏著『兒童詩發展段階』を讀む」
 - 「工程」昭和十一年五月號
 - 「綴方理論の大衆化」
 - 「工程」昭和十一年八月號
 - 「綴方實踐の大衆化運動とその方策」
 - 「工程」昭和十一年九月號
 - 「本年度版の諸特質」
 - 「工程」昭和十一年十二月號
 - 「昭和十一年綴方教育界の諸問題」
 - 「工程」第三卷第一號

新名主 健 一

（一九八九年十月十五日 受理）

二、「潮音」誌上における磯長の和歌

大正十年

「潮音」第七卷一月号

友の心

けふもまた雨の降れば海よりきて大川の水に千鳥啼くなり
川のべを啼きつとべる濱千鳥声あはれなり時雨るなかに
たまきはる生命をかけて恋ひたるなり報ひはなしと云ふかわが友
しみじみと田井に麦蒔く人らあり吾れこの村に絵を描かんとす

「潮音」第七卷三月号

葬火

墓山に人を葬むる鉦ならんかすかにとほくに鳴り来
葬火は消ぬがに立ちて消えけり涙をながし念佛申す
しごとやめて熱き茶を飲む夕べなり障子濡らして時雨は通る
怠りを悔ゆる心のあらはなり障子を濡らす雨の音かも

「潮音」第七卷 四月号

月あかり

遠くゆく人を送ると海に来て寂しき心砂を盛るなり
冬晴れや海を距てて掛宿の人らの家居手にとるごとし
海のいる曇り来りていちちやく鳥山裾は雨にけぶれる
下り坂展けて村は一望^{ひとゆ}なり空に聳ゆる銀杏の枯木
暮れのこる大川の水の寂しき色潮風まとも吹きながれゆく
人のかげ月夜あかりにおほおほし親み心よせて行くなり

「潮音」七卷 五月号

生長

この朝の時雨をよけて家蔭に訣ればなしをする二人かも
窓のべの芭蕉の蔭に立ちてゐてつましかりし人の面影

おのづから寝覺められしきこの朝鴉のこゑは空にみちたり

よべの雨霽れし朝の木の雫睦月この村梅さきにけり

大川の水に来て浮く鷗鳥雨のあしたのしづごころかも

あしびきの山峡間に立つ靄を我窓にしてかなしき朝かな

山の雪告ぐる母なりこの朝の味噌汁煮ると畑に出でて

おのづから湧くうれへなればだら雪ふり積む朝の山に向ひて

「潮音」第七卷 六月号

村居

さらさらと松の梢の撓る音寂しき人を思ひつづくる

住み慣れて愈よ親しき前見山夕べの色に暮れてゆくなり

山かげの奥津城所静かなり梅のさかりの里見下して

海に来て身はすくはれし思ひなり空いちめんに映ゆる夕雲

山越えて遙々とし乗馬兵ゆうべ賑やかに村に入りたり

「潮音」第七卷 七月号

開聞山

野に出でて働く人は寂しからん茶の木の蔭に湯呑を置きて

遠く来て寂しと思ふこの丘の草に坐りて海を見てゐる

雨やがて晴るるさまなり霧の間に姿を見する開聞の山

日曜に城跡に来て書きしてふ人のたよりはなつかしきもの

わらはべを教へ教へて山の村に人の嘆のあらたなりけり

「潮音」第七卷 八月号

空晴れて

かへり来て苺畑の草除るをこのごろのわが樂しみとせり

繭の値を讀みあぐる聲遠く洩れてあかあかと灯の親しき夕べ

湯あがりの眠たきほどの静けさに遠田の蛙鳴き出でにけり

時の間を居て歸りゆく春雄なり歌の話がこの日の別れ

よろこびを乗せつつ走る汽車にして眠りは深き汝をぞ思ふ
ものの本飽かず讀みつつ朝に夕に安らかなりと告げてやらまし

梅雨明けて日の空に鳴く鶯の聲村の田植もおほかた終へぬ

「潮音」第七卷 十月号

海邊

星くづの夜空にくろき開聞嶽海を隔てて静かなるかな

おのづから夕べとなれば海に來て心のうれへをうたひいづるなり

大浪に乗りつつぞ行く友の舟を濱邊に立ちて見送りてゐる

朝たけてやうやく暑しこかしこ木槿の花は日に咲きてゐる

「潮音」第七卷 十一月号

村家

日に照るや青く澄みつつ山巖のあらはにかなし櫻島山

道もせにかしぎ垂れたる笹竹の峽間の村を越えて行きけり

雨にぬれやうやくつきし瀬々串の村家はすべて兎を飼へり

降る雨にこもりて人と静かなり霧ややはれて窓近き山

海近きこの棚田の稲の葉は潮にいたみて枯色なせり

寂しさをとめて來にけり崎鼻に寄せきておだむ磯波の音

濱近くこの入江にふね泊めて晴々しかも町の屋竝は

「潮音」第七卷 十二月号

わく兒

朝の雨にふりこめられて隣りの兒かはゆきかもよ本讀む聲の

いちはやく隣りに起る朝のうた牧夫がうたふ鳩ポツポ歌

十五夜の月に網引く子供らのわかさは吾にかへり來ぬなり

山蔭の草生がなかに咲き出でて災だちたる曼珠沙華の花

雲のゆきかはればかはる山の色風落ちゆきて日は暮るるなり

とめくれればこの山蔭の粟畑秋風の中に寒き色なり

まちまけてきのふも今日も暮したり昨夜の夢は「潮音」のゆめ
大正十一年

「潮音」第八卷 一月号

茶の花

土間に來て馳なくなり母と我と甘酒を爐にわかつて居れば

刈りはてて寂しくなりし門の田に時雨いちめんふりて來れり

あさり來て門田に遠く遊ぶ鶏尻毛は風に吹かれつつある

朝蘭けて日はまともなり落花生ここにかしこに乾してある村

山の宿に兄と寝てするものがたり鶉たまたま啼く寒夜なり

「潮音」第八卷 二月、三月、四月号なし

「潮音」第八卷 五月号

○

啼きうつる山の小鳥ら我か窓につく群が來て朝蘭けにけり

日ぐれ來て風色寒き練兵場入り日に向ひ行く人のあり

木枯の中にたちつつ思ふこと明日と云ふ日もたのまれぬなり

あの山は櫻島なり遠く來てこのよろこびにふれにけるかも（行軍）

草を刈り疲るれば來て木の蔭に晝寝するなり「セザンヌ」の牧夫

花の野の霞に深くとけいりて姿寂しく啼く雲雀なり

ゆく春を惜むころぞあげ雲雀羽根ふるはせて啼くにあらずや

「潮音」第八卷 六月号

○

おのづから歌ひいでたる歌の聲春の野づらにひびきわたれり

大根の花にかくれてゆきにけり響きたのしき子供等の聲

薔薇の花照る日に咲きてゆたかなる春の恵みにわれ逢ひにけり

むらぎもの心一途にせきあぐるおのが願ひに泣かされにけり

「潮音」第八巻 七月、八月、九月、十月なし

「潮音」第八巻 十一月号

萱草の花とあそべばたあいなし口笛を吹くわれの癖かも
コスモスの垣をめぐりて咲く家に遊ぶ蜻蛉がうらやましきぞ
父母よ秋は來にけり朝な朝な菜の味噌汁をすすりるまさん
大正十二年

「潮音」第九巻 一月、二月、三月、四月、五月号なし

「潮音」第九巻 六月号

歸り栖みて(特選)

人を焼く野邊の送りの入りつ陽にこらへかねたる涙を落とす
今朝ことに聲賑やかにゆく子らに幼心をよせてをりたり
硝子戸の向ふに見ゆる雑木山騷立ちにつつ雪荒れくるも
夜まはりが叩く拍子木の音きこゆ仕事をやめて寐まる時なり
門の邊に日永く咲きし寒薔薇の花ちりそむるあたたかさなり
菜の花にうたたねもせん日和なり筵をしきてあそべる子ども
ふるさとの山見えそめぬ父母の姿とおもふ櫻島はも
坂道の見えきたりたるその人を父かと思れば父なりにけり

「潮音」第九巻 七月号

葡萄棚(特選)

山の手の林におこる子どもらの戦さあそびに春は闌けゆく
花咲きて家居明るくなりけり日傘ちらほらゆく垣根道
葡萄棚洩れくる朝日あかるくて巣箱を出づる雌鶏のこゑ
家並の上に晴れたる青空にカラロとなりぬ五月熾は
屋根の上に落葉たまれりあぢさゐの花一株の山かげの家
窓あくれば外は明るき五月晴日傘かたむけ人出でてくる

ペリカンのこゑするどくも響きたり池水にすむ青空のいろ
子どもとは思へぬわざをふるまひて怖づるいろなき薩摩の子らは(少年野球)

「潮音」第九巻 八月号

日和風(特選)

子どもらと野に出て遊ぶ蓬摘み幼きものとなりけるかな
寐ころびて聞けば一入あはれなり春も老けゆくどうづきの唄
肥つみてのぼる舟脚おもおもと葦の若葉をおしふせてゆく
萱叢を吹きなびけゆく風白し汐鳴り近く海へ出る道
戸袋の壁にすがれる青蛙足ふんばりてをさなげなるよ
陽はぼうと霞みて沖の汐曇り海のあいろの寂しまるるも
乳母車ひきすてて人は居らぬなり樗の花の蔭ふかき庭
雨やんで色よき松のながめかな網うつ人のあらはれて見ゆ

「潮音」第九巻 九月号

日毎の勤(特選)

五月雨のふりけふりたる港街傘かさなりて混み合ふ人ら
植まつけの茄子にこやしをやるひまも旅ゆく友を思ひてゐたり
無花果の葉にそぼそぼとふる小雨蟹一つ部屋にのぼり来にけり
ころころと蛙のこゑのたのもしき柳田の堰は水あふれたり
あげ汐やなにかこころのはづみ来る葦邊の水を泳ぐ子どもら
鱗雲一流れしてわが窓に久しぶりなる蒼空のいろ
松蟬のこゑのいきるる豆畑土瓶の水をのみてはたらく
合歡の葉の眠る夕べとなりけり風呂を呼びたる隣り家の聲

「潮音」第九巻 十月号

白き道(特選)

機を織る村にきにけり日盛りの垣根にからむ凌霄花
ちろちろと樋竹を落つる水の音池に菖蒲の花咲きにけり

蓑笠の一竿にならびうごくなり河邊の葦のよしきりの聲（田植）

この庭の蘇鐵の新芽ほだちけり光寂びたる弥陀の本堂
堂裏の墓地へつづける細道にかすかに青む苔のいろかな
くれのこる木権の花の夕明り蜻蛉をさなくいまだ遊べる
草土手の木権の花にあそぶ馬尻尾振りふる寂しさをして
蟬袋に蟬を鳴かせて子はゆけり眞晝ざかりの公園の道
けふの日も暮れにけるかも閑古鳥青杉山にふかく隠れて
玉蟲の翅の光りて飛びにけり夏日にむせて白き道ゆく

○ 「潮音」第九卷 十一月号

撫子の花もしほるる暑さかな荷馬は埃の中生きにけり
七夕の笹の露づく夜はふけて灯を消しにけりわが山の家
さやさやと揺るる月夜の竹林人の情は身にあまりたり
その兄は乳母車押して行きにけり夕べ涼しき草土手の道
二つ三つ白帆ちらしたゆらなる薩摩の海の秋の日の照り
軒雫落ちくるほどの夜の雨にこころほどけてゐたまひにけり
草の家の軒に灯して魂迎ふしづかなる夜はわれにきにけり（父）

○ 「潮音」第九卷 十二月号

休刊（震災後の臨時処置として）

大正十三年

○ 「潮音」第十卷 一月号

ふらふらと月夜を来れば竹藪の奥手にありて餅を搗く家
乾瓢を干しならべたる寺庭に匂ひをひろぐ蘭の花かも
幾坂を越えては来つれしらじらと立かたむけて咲く蕎麦の花
子どもらとお宮の庭にひろひたる椎の実は手にあまるほどなり

行燈の灯かげ佗しき集ひなり水鶏笛吹いてゐたまひにけり（芭蕉翁）
菊の花咲きつづく日となりにけり障子明るき山下の家
棕栢の葉にむすぶ夜露の身にしみて冬めく星の空の冴えかも
この庭の樋竹を落つる苔水の音さるさると寒菊の花

○ 「潮音」第十卷 二月号

朝たけて時雨模様となりにけり沖にひろがる潮けぶりかも
のっそりと七面鳥はあゆみ出てしぐれの雨の晴るる朝かも
古竹の樋もこはれる朝寒に冬菜の青み眼にしたしまし
ばら色の夜明けの空に浮び出て眉うつくしくとりよろふ山
うらかな日曜日なり千紬を縁にひろげて日向ぼこする

○ 「潮音」第十卷 三月号

冬晴や薩摩の海の青潮に羽根光らせてひるかへる鳥
縁先の八つ手の花に虹むれて羽織をぬぎし正月日和
朝早くお寺詣りをする人に鳥も来てなく極楽日和
刈小田の根株芽をふく日和かも春立つ早きみんなみの村
岩の上に涙をおとす小鳥かやたよりなげにも暮るる冬海
足袋羽織ぬぎても遊べ寒ばらの花のくづるる小春の日和
わがものとなさざらめやもきささぎの星にも云ふ棕櫚の葉のこゑ

○ 「潮音」第十卷 四月号

竹藪に霰がふれば冬ごもりいとどわびしく何もせぬなり
蓮池におたまじゃくしが尾をふりて朝から寺の鐘きこゆなり
やするまで風に痩せたる穂芒の一重心よたのまるるなり
丘の上の菜の花日和とんで来て蟬も蝶々も顔あはせたり

寺藪の奥より雉子の声ひびき春雨らしくなりにけるかも
その歌の一つ一つのいたまじき顔がならべり信濃の人の
その歌に似てたのもしや白粉も紅もにはほぬ木綿着の人(梶浦氏)

○ 「潮音」第十巻 五月号

筍の竹の林のしづけさにこころ憂き日をひとり入りきぬ
海棠の蕾ふくらむ宿の庭土あたたかに鶉の啼く
毛糸あむ子をあそばせて軒下に干し大根の乾く昼なり
おぼろ夜の花の明りや夢ならぬたのしきことのわれにあるらし
眼をあきて見る硝子戸の朝明り汽笛をならすふる里の海
フリジアの花鉢一つ床の間に匂ひこぼるる家に来にけり

○ 「潮音」第十巻 六月号

菜の花の峠を越えてゆきにけりいくたび空に雲雀あがりし
フリジアの花に五輪の小床かなかなしみふかく籠る幾日
青麦の走り穂見ゆる田圃道ふる里の春に帰り来にけり
鶉の鳥の雨にぬれたる姿さへ旅ゆくわれの憂へととなりて
誰れか吹く草笛ならむ走り穂の田園見てゆく幌馬車のうへに
苔生えて古き屋廂佗びてすむ片山かげの橙々の家
藁はこぶ巢どり雀のせわしさに日の入り惜しむ春のくれがた

○ 「潮音」第十巻 七月号

とよもして蛙が鳴けばわが憂へ胸せきあげて涙となるも
鯉職とびとびに立つふる里の若葉の春も久しぶりなる(人に)
鼻がほうほと啼けばちち母のこひしくあらし遊び呆けても
相ともに脇をひらきて一途なりながす涙に悔はなきかも

なにかそのうれひありげの姿なり雨に濡れたる藤なみの花
一しほの寂しさまさる思ひかも闇をつんざきて啼く杜鵑

○ 「潮音」第十巻 八月号

星(特選)

告げたさの思ひは胸にあまるぞよ星にかけきて幾日ならむ
働けばかなしきことも忘るなり闇せまりきし教室の窓
鳳仙花かすかに咲きていつとなく散るはかなさに似たる命か
蓑を着て学校にくる子供あり五月雨ふりとなりけるかな
鯉職風にはためきて晝霞空のはてまでひるがりにけり
柿の葉に軒端明るきわが住居鳥の巢立ちをよろこびにけり
梅雨晴れの飛行日和となりけり開聞こゆるプロペラの音

○ 「潮音」第十巻 九月号

蟬啼く頃(特選)

わが胸にしみてなぐるる蟬の声しづかに山も暮れ初めにけり
梅雨すぎて夏いやふかむ七月の佐夢のみさきの白雲の凝り
かへり来て庭に水まく気やすさにそよぎも出づる青竹の籟
ひらりひらり螢ともして舞ひゆきぬ埃おちつく草藪の道
夏といへどまだ鶯の声惜しむ村にもいつか住みなれにけり
くちづけて蓋をはなれぬ蝶々の夢美しき眠りを思ふ
忙しさは夕べとなりてひとしきり膳の支度をととのふるらし
夢さらに人の誠をうたがはず祈りつづけて夏となりけり

○ 「潮音」第十巻 十月号

蟲干(特選)

向日葵の花かたむきて風車しきりにまはる屋根の見はらし(測侯所)
旅ごころひとりはうしや溝川の泥の匂ひのみなざらふ道
沼尻のどろにかくれて魚小さし蓮にこぼるる夕立の雨

四五本の朱欒を庭の山住居しづかなる世を羨みにけり(伊勢氏)

暑き日や西瓜まくらにつくづくと晝の寝どきもわずれたるかな
あけ汐は中洲の葦をひたしつたまたまはねて飛ぶ魚のあり
夕立に蛇の目すばめて廣重の繪をひろげたる橋景色かな
ともしたる盆どうらうのはればれと魂もきてるんわが家の軒

「潮音」第十卷 十一月号

彼岸曇(特選)

鶏遠く大豆畠に出てあそぶ秋の小村の旅をゆくなり
暮れはてて雨の泊りとなりけり襖の色の煤けたる宿
ひぐらしのせかせか鳴いて日の暮れの山の麓に宿とりにけり
沼陰に片よりて咲く水草の花しづかなり君がふるさと
あの山の彼岸曇りに霞む日は歌よみて人をしのぶなりけり
面白く蝗は草に遊びつつ野稗のみのり色に出にけり
浮び出て緋鯉もせなを見せにけり虹美しき噴水の池
障子あけて人の寢息のすやすやと夏蠶の繭をつくりたる家

「潮音」第十卷 十二月号

丝瓜(特選)

青北の荒模様ぞと戸を閉して晝も寝てゐる磯の一つ家(青北は日和の事)
空はまだ紫苑の花に月照りて眉きよらかに眠りたる山
厨邊になくこぼろぎのほそほと米磨ぐ母と思ひさびしむ
いそがるる冬の仕度の夜なべして山の鼻を寂しがるかな
まんまるく月はのぼりぬよろこびの夕顔棚にあまる宵かな
秋ふかく隣りの人もすみにけりまがきにからむ丝瓜の蔓
雁の聲空ほんのりと茜してなごろの波の遠くなりたる
竹島も霞む峠の見はらしに鷹を見つけてたのもしかりき

大正十四年

「潮音」第十一卷 一月号

唐芋(特選)

小山田の鳴子の音にきこえきて晝の茶に食ふ唐芋の味
糸わくの前に小さく坐りたる袖なし姿母寂びにけり
晝一日障子をしめてこもるらし藪かげ白くひらく茶の花(人に)
雨冷えぬ障子をしめてこもる日は古き手紙を出して讀みをり
糲干して縁の日向のあたたかに恵まれてゐる山住居なり
いつとなく夜は更けぬらむけふもこの日記のはしに歌書きつけつ
栗の實のえみてこぼるる山日和鳥わなかけてわれのたのしむ
岩にしむ磯の匂ひのつくづくと船蟲とゐてあそぶ晝なり

「潮音」第十一卷 二月号

湯豆腐(特選)

とむらひの鐘がなるなり目を閉ぢて無縁の人にゆくこゝろかな
火にかけて煮えこぼれくる味噌汁を吹き吹きすゝる曇日の宵
新妻と人目にたゝぬ佗住のしづかなるかな歌の掛軸(久木田兄)
軒の日に色づき來にしつるし柿しづかに歌をよむべかりけり
うちむかふ冬の荒海日のすさまじく潮かぶりゐる磯の網小屋
帰りきて旅の話もそこそこに葱の畦間にかくる水肥
竹の葉に宵の時雨のさらさらと膳にのぼせん湯豆腐もがな
草しきて密柑の皮をむきてをり空を小さくゆく渡り鳥

「潮音」第十一卷 三月号

とろゝ汁(特選)

新割りて日暮れとなりしくりやぬちとろゝする音きこえきたりぬ
川尻の水雛寒き日の暮れに聲みだれたる濱千鳥かも
霜晴れや萬雨の實の日だまりにかつが霜の解けそめてをり

